



敬愛大准教授・教育哲学者

佐藤 邦政さん

「問いほぐし」で前提疑おう

新学習指導要領で重視される「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」。「どう受け止めたらよいのか」「問いほぐし」という言葉を用い、問いの前提を疑う姿勢の大切さを訴える教育哲学者に、聞きました。

「主体的・対話的で深い学び」の「深い」として何だろう。最近「自ら問いを立てさせ、考えさせるのが大事」というのがお決まりのフレーズですが、なぜ大事かということまで論じられることはあまりありません。

ソクラテスの問答法では、問われた人は答えるだけでなく、新たな問いを生み出す役割もある。僕はそれを教育で強調するため「問いほぐす」という用語を使います。

例えば大学の授業で「スポーツはなぜ楽しいか」という問いを議論する。ふと1人が「別に楽しくない」と発言した時、最初の問いに「スポーツは楽しい」という前提が隠れていると気づく。こうした前提を問いほぐし、「そもそもスポーツの意義とは？」など、答えが簡単に用意されていない問いに行き着くことが重要ではないでしょうか。

うまく意見が言えない学生や子どももいるでしょう。でも教室で活発に意見を言うのが主体的とは限らない。図書館で本を調べながら自分と対話することもできます。

意見を言いあぐねている子がいたら、先生は答えをポンと手渡さず、うまく手を差し伸べてほしい。問いほぐしの教育は子どもへのエンパワメントです。社会に出たら、いつも公平に発言できる機会があるとは限りません。性別や人種など特定の属性への偏見や差別があり、自分の経験や知識を社会に伝えられないこともあるかもしれない。そんな時のために、権威がある人に対しても自分の言葉で問いを発する力をつける教育が必要です。

「これはどういうこと?」「と問う子どもが増えれば、社会の不正義の是正につながると思います。」
(聞き手・宮崎亮)

■ ■ 深い学びとは

学びを語る

かとう・くにまさ 1979年、千葉県出身。上智大と横浜国立大でも非常勤講師を務める。教育学修士(東大)、哲学博士(日大)。著書に「善い学びとはなにか」「問いほぐし」と「知の正義」の教育哲学」。